平成 27 年度（平成 27 年 4 月～平成 28 年 1 月）の活動報告

4 月　新入部員を迎える。今年は 7 人が入部。

写真甲子園予選作品作り本格化。

松原市広報課との学官連携企画で広報誌の 1 ページを毎月協働で作ることに決定。「私の相棒」シリーズと称して、市内のお店や工場などを取材することに。

5 月　写真甲子園予選作品完成。今回はスマホをテーマに作品を作った。

写真甲子園近畿ブロック予選トップ 10 に残り、6 月の最終審査にむけてプレゼンなど練習。

6 月　写真甲子園最終審査にて、本戦出場が決定。（2012 年に続き　2 回目）大阪では生野高校のみ。もう一校は和歌山の神島高校。

平成27年6月20日

毎日新聞より抜粋

スマホと人々 活写！

写真甲子園 生野高代表に

第22回全国高校写真選手権大会（写真甲子園2015）の近畿ブロック公開審査会が20日、大阪市内であり、府立生野高校＝写真＝と和歌山県立神島高校がブロック代表に選ばれた。両校は8月に北海道で開かれる本戦大会に出場する。

「写真の町宣言」をしている北海道東川町などでつくる実行委員会が主催。3人1組による組み写真で競う。今年は全国で514校、近畿は74校が応募。予選を勝ち上がった10校がそれぞれ作品をプレゼンテーションして審査を受けた。

生野高校の作品は「スマホビト」。スマートフォンを操作するさまざまな姿を8枚のカラー写真に収めた。神島高校は「おっちゃんの誇り」と題して、工場で働く従業員の表情をモノクロ写真で切り取った。【藤原規彦】

8月3日～9日まで北海道の東川町で開かれる本戦大会に参加します。ネット中継あります。

NSBクが4強

クラブ野球1次予選

社会人野球の第40回全日本クラブ野球選手権大会大阪・和歌山

試合が予定されている。

▽1回戦

八尾ク　000 000 100 1

NSBク　302 001 00X 6

（八）広瀬－長田（N）西原

7 月　芸文連　夏の撮影競技大会（組み写真制作）3 位入賞！

和歌山の神島高校、福井の丹生高校を招いて大阪府内で開催。

長居公園内で撮影する選手たち

信貴山玉蔵院にて夏合宿。（2 泊 3 日）ここで腕を上げられるかが勝負！

夜も花火をしながら撮影会。

8 月 全国高等学校総合文化祭（滋賀大会）に２人参加。

創部から連続 4 回目。

比叡山撮影会のケーブルカー

比叡山延暦寺にて

写真甲子園本戦へ出場！（３年ぶり２回目）いざ、聖地東川へ。

２度目も敢闘賞に終わったものの、生徒たちの確かな成長を実感できた貴重な １週間。ここで出会う人たち、ここでしか味わえない宝石のような時間がある。
ありがとう、写真甲子園。ありがとう東川町。そしてここで出会った全ての方々に感謝。

また、新たな挑戦が始まる。

全国高文連主催日韓高校生写真交流の集いに参加（１人）

日本と韓国の高校生がそれぞれの国を互いに訪問し、写真を通じて 10 日間の交流をする交流会。

交流期間中に撮影した写真のコンテストもある。写真は入賞作品。

まつばら子ども探検隊撮影ボランティア

放水訓練の様子を撮影

天王寺動物園撮影会（夏休み最後の撮影会）

これも恒例になってきた 5 年目の行事。

9　月　文化祭作品展示　二日目は後夜祭などを撮影

栗拾い＆撮影会　楽しく栗を拾って、みんなで撮影会！これも恒例行事。

太子町にて

10 月　芸文連　秋の撮影講習会　秋のフォトコンテスト

大泉緑地にて撮影会開催。1 年生が最優秀賞を受賞。

受賞作品「HANA 美人」

11 月 秋の紅葉撮影会

延命寺や長居公園を 2 回にわたって撮影。

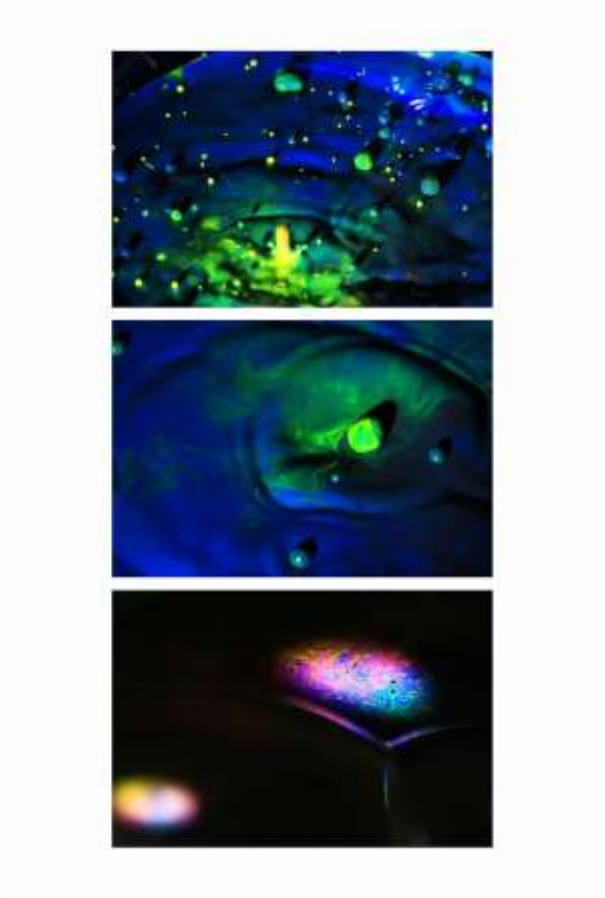
12 月 冬のイルミネーション撮影会

そして、いよいよ平成 28 年度の全国高等学校総合文化祭（広島大会）行きをかけた大阪府高等学校芸術文化祭が 1 月に開催されました。

今年度の締めくくりとも言える写真展。生野高校からは 2 名の全国行きが決定しました。1 年生、大活躍です。顧問作品評と共に、作品をじっくりご覧下さい。

第 36 回大阪府高等学校芸術文化祭写真部門 出品作品解説

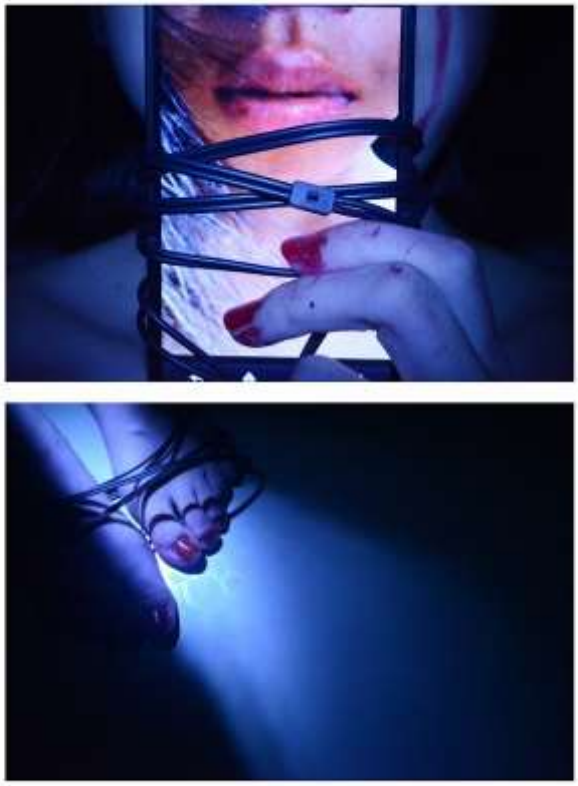
平成 28 年 1 月 30 日（土）～31 日（日）



顧問作品解説

ＴｈｅＥａｒｔｈ

ビッグバンから星々が誕生するようなイメージを映像化しようと奮闘した作者。
ライティングと高速シャッターによって、不思議な世界を浮かび上がらせた。
シャボン玉と絵の具を駆使して、相当な時間をかけて撮影に臨んだのであろう。
実際はかなりミクロな世界を大きく見せている。
「写真」は「真を写す」と書くのだが、実際は結構うそつきである。現実見たままが写真になることはむしろ稀であって、何かしらの作者の表現意図が入ることになる。「これ、どうやって撮ったんだろう」と見る人に思わせるのも、一つの表現である。しかし、この手の撮影はなかなか意のままにならない。ある意味２度と同じ写真は撮れない。偶然と必然のコラボレーションこそが写真とも言える。



顧問作品解説

自縄

冷たく、怖い映像である。しかし撮影は、意外と冷静に淡々と進められたのではないか。人間の闇（病み）の部分を、目に見える形で表現することは、時に憚られる行為だが、包み隠すことなく、さらけ出すことで何かを乗り越えようとしている姿にも見えてくる。生きていれば、誰だって辛いこと、悲しいことに遭遇する。ちょっとしたすれ違いや無邪気な過ちに、人は傷ついてゆく。誤解、偏見、思い込み、漠然とした不安、そういうものから私たちが完全に自由になることは難しい。傷ついた心を癒す「鎮魂の儀式」の一つの形として、若い世代が芸術という手法を借りる試みがあると感じる。

しかし、これはゴールではない。次なる開かれた世界へのステップとして、これを期に新たな映像表現に挑戦して欲しい。

顧問作品解説

時

いわゆる「シャッター通り」を撮った写真である。わざと傾けた画面が不安定さを増し、荒れ果てた天井からも衰退のにおいが漂っていて、この商店街の行く末が決して楽観できない状態であることを感じさせる。
それに抵抗するかのような、右上にある「奉仕日」の文字。このような町の変化をきっちりと記録してゆくのは写真の大きな仕事である。「写真は記録」これは

誰もが納得する定義であり、この記録性こそが他の芸術に真似のできない写真の専売特許である。

顧問作品解説

裏社会

新世界界隈で出会った人たち。高校生にとっては、それほどなじみのある場所や人ではないだろう。しかし、フレンドリーに撮影者の存在を受け入れている姿がよく写っている。特に１枚目のショットが素晴らしい。今から店をオープンするところか、ようこそいらっしゃいという趣がよく出ている。真ん中で機嫌良くお

酒を飲むオジサンたち、そしてじゃあまたねと手を振る人。どれも作者の予想を良い意味で裏切った人たちの肖像ではなかろうか。
タイトルと写真の間に違和感を覚えるだろうが、先にタイトルを決めた後で、良いショットが撮れてしまったという皮肉から起きてしまった矛盾である。タイトルは大事。これは今後の反省点。

顧問作品解説

そして大人へ

家族の肖像である。本校の制服を着ているが、これは数年前の姿を再現したもの。振り袖は今の姿だ。
身近にいていつでも撮れそうで意外に撮りにくいのが家族。しかし家族の中に、１人でも、その歴史や変化を、丁寧にそしてさりげなく記録してゆく人がいることは大事なこと。全ては流れてゆく。今、ここ、でなければ写真は撮れない。そ

の時と空間に支えられて生きている自分の周りにいる人たちを愛おしみつつ作者には撮影を続けて欲しい。

顧問作品解説

教訓の下

こんな懐かしい標語が掛けてある工場も今では珍しいのではないか。何十年も前からここで教訓を垂れてきた看板の下、黙々と働く人がわずかに写っている。
もちろんこれは作者の意図が反映されて出来た映像に違いない。看板をメインにして、働く人を脇役に配したアイデアは面白い。ただ、ある意味わかりやす過ぎたのが残念。すべてを、写真で説明してしまった感がある。写真はどこか謎めい

ていたり、破綻があったりする方がおもしろい。整えすぎは、禁物なのだ。それは、写真という芸術が想像力によって支えられているからだ。
見る人に遊ぶ余地を残しておく、これは写真に限らず、制作者と鑑賞者の協同作業で成り立つ芸術に共通するセオリーだと思う。

顧問作品解説

ある日の昼下がり

俯瞰で撮影されたため、それぞれの人物の動きが手に取るようにわかる。屋外の、あまりロケーションがいいとは思えない場所で、鍋の用意をする夫婦、その傍でわれ関せずと、ゲームに興じる子供、そして寝返りをうつような姿勢の赤子。どうやら場所は日本ではないようだ。よく見るとハングル文字が書いてある袋があって、韓国に行った際の撮影である。
休日の家族風景だが、ここにも小さな幸せが写っている。何と言うこともない、他愛ない日常の中にこそ、そこに生きる人たちの思いや人生が滲み出る。

顧問作品解説

スパイ中

愛らしい黒猫が顔を覗かせている。ちょっと怖々としているようにも見える。その警戒心を感じて、このようなタイトルにしたのだろうか。動物写真の中でも、犬と猫はいつもダントツの人気被写体である。それゆえ、ただカワイイというだけの犬猫写真は見飽きられていて、新鮮味に欠けてしまうデメリットがある。今回の展示作品にも猫を撮った写真が 2 点あるが、このような被写体を選ぶ際は、これを肝に銘じておかねばならない。

しかし被写体としてそれらを避けよという意味ではない。ありふれた被写体を選んで、なおかつカワイイだけでは終わらないという写真を追究しなければいけない。

顧問作品解説

家族愛

この作者の家には猫がたくさんいるらしい。きっと大事にされているのだろう。一緒に寝ている女の子も幸せそうである。猫と女の子の様子がどことなく似ていて相似形を為している。しかしながら、人間が猫に抱く感情や先入観は、ある意味、猫の真の姿を曇らせてしまうかもしれない。色眼鏡を一度外して、じっくり猫を観察すれば、多面的な様子も見えてくるかもしれない。
写真は、撮るという一瞬の行為を起こす前の時間がとても大事。とことん見て、感じて、ここぞという決定的瞬間を捉える、言い換えれば、忍耐力と感受性、そして瞬発力を存分にふるってこそ名作ができる。

顧問作品解説

私のセカイ

文化祭のコンサートで撮影したカットだろう。照明がギターの表面にわずかな光彩をつくっている。舞台は、それほど光が十分とは言えず、写真は自然とスローシャッターとなる。ストロボを当ててしまえば、速いシャッターは切れるのだが、コンサート中は原則ストロボは御法度。感度を上げて速いシャッターを切る方法も無いわけではないが、ここはスローシャッターを活かしたいところ。人間の目は 1/60 ほどの速さでものを捕捉しているらしいがカメラの目は、これが自由自在である。人間の動きに動感を与えるためには、ほどよく遅いシャッタースピードが必要である。この写真はそういう意味で、いいシャッタースピードで捉えられている。

顧問作品解説

人を飲む人

コップを通して見えた人を、コップに封じ込めてしまうという発想がおもしろい。写真は発想力で大きく変わる。発想力は物の見方を変えることにつながってゆく。物の見方が変われば、きっと考え方にまで変化が生じる。
人と同じ事をしてもつまらない、何か独創的なやり方はないものか、と貪欲に発想をめぐらせるクセをつけてもらいたい。かといって、奇を衒って妙なことをせよと言うのではない。ちょっとしたアイデアをしぼる、スパイスを効かせるという程度で十分だ。この場合、飲まれてしまう人の様子が、写真のおもしろさを決定する。これ以上の写真にするにはそこをどうするか。次の発想力にも期待する。

顧問作品解説

笑顔の理由は

今年度から写真部が始めた「広報まつばら」とのコラボ取材。先日訪れたお菓子屋さんでのカットである。半世紀にわたって、半生菓子を夫婦で作ってこられたそうだ。この笑顔の理由は、そうやって働いて来られたことに対する感謝の気持ちかもしれない。取材に同行した人にはそれがわかる。しかしながら、写真そのものに、それを語らせなければいけない。

この方の仕事に対する誇りや喜びそのものを、写真を見る人が自然に感じるような映像を目指さねばならない。言葉以上に雄弁な写真、説明などいらない写真、そのような「強い写真」を目指してもらいたい。

顧問作品解説

学徒の拳

本大会、優秀賞受賞。（約 300 点中トップ４）今夏、広島で開催される全国高等学校総合文化祭に推薦が決定した。
独特の雰囲気が漂う不思議な写真である。どうやって撮ったんだろうと聞きたくなるかもしれない。あえてここでは種明かしをしないが、随所にかなりの工夫が凝らしてある。その工夫の跡が見えないところがいいのである。技巧はそれが目

立ってしまうと、鼻につく。最高の技法は裏に隠れていなければダメだ。女子高生の怒りの鉄拳を見た鑑賞者は、思わず写真に引き込まれてしまうのではないだろうか。
往年の人気漫画をもじったタイトルをつけた作者だが、これには賛否両論あるかもしれぬ。写真の迫力を削ぐと見るか、茶目っ気ありと見るか、この辺は考えどころか。

顧問作品解説

64 年目の証

欄間（らんま）や祭のだんじりの彫刻を手がける職人さんを活写した作品。

本大会、奨励賞受賞。（約 300 点中トップ 10）今夏、広島で開催される全国高等学校総合文化祭に推薦が決定した。
良い光で良い被写体を選び良いシャッターチャンスで撮る。この三拍子が、揃っている。口で言うのは簡単だが、人物写真はまず信頼関係だ。真ん中の表情を引き出すには、自分という人間を受け入れてもらわないと無理である。相手のふところに飛び込んでいき、誠実に話をする。相手が自分を信じてくれて初めて写真を撮ることが許される。
人を撮るのが難しい時代だと言われる。しかし信頼関係が構築されている限り、トラブルになることはない。コソコソするのが一番いけない。堂々と、写真を撮っているということに誇りをもって、撮影に臨まねばならない。